ソマソールト

枝本勇雄

本籍、岡山県和気郡三石町
大正七年東北帝大理学部卒業
昭和十年陸軍省陸軍教授
大正十一年東北大理学部助手
大正十二年同講師、大正十三年同工学部助教授
昭和十八年理学博士
昭和十八年同教授

大学に入学した当時のこと、騎兵隊で大学生に乗馬の練習をさせてくれるというので自分も参加した。翌春の三月すこし心得たつもりで宮城野原まで遠乗りした。原につくと三々五々自由に乗廻わした。もう青草が芽をだしはじめ春の訪れを感じさせ東の方から暖かい風が静かに吹いてくる。馬は鼻の穴を大きく開いて力一ぱい東風を吸い込むと急に活気づいて走りだした。そのとき後の馬が近づいたのに驚いたと見えて急に棒立ちになりあまつさえ激しく胴を振つたので宙高くはね飛ばされた。空中で一回転して、丸くなつた形ではあつたがイヤというほど地面に脊中をたたきつけられ息が一度にでてしまつたように感じた。痛いのを我慢して立ち上ると教官が「今の落ちかたを見たが、あれは模範的な落ちかただ。あのように落ちると決して怪俄をしない」とほめてくれた。これで自信をえてその次に練習に行つたとき、亀ケ岡の上の方の山に向つて出発し

た。金のついた靴をはいていたため鐙から靴がはずれるのでたびたび馬を止めて直すうち、列からおくれてしまつた。山上の平らなところにでると馬はひどいスピードで走りだした。靴がまたはずれたが直すいとまもない。そのままで乘つて行くうちに身体は鞍から前にはずれて、馬がはねるたびにだんだん前方に移動してついには耳の近くに跨がることになつた。馬も驚いたことと思う。かくなる上は落ちるよりほかに手がないので身体を横に倒して落ちた。馬は大きくはねて踏みつけられることは免かれた。起き直つて見ると馬は一〇米ほど先に進んでいる、手綱を横に流したまま。しまつた、落ちるときには手綱を握つて落ちるようにといわれていたのにと思つて走つて行き手綱をとろうとすると急に脚を横に向けて蹴つてきた倒れてかわしたものの、かわしきれず顔面をしたたか蹴られ負傷した。

十数年後の秋の末、九才位になつた娘を連れて深沼の方に魚釣りに行つた帰り途、自転車の座席の前に娘を乘せて夕暮の迫る道を急いでいた。点灯しようと思つて乘つたままで前にかがんだ拍子に腰の籠が前にゆれてハンドルと膝との間に挾まりカジがきかなくなつてアッというまに道路脇の堀の中に飛び込んだ。水面は道路から五尺位下にある。私は途中で半回転して頭から先に四尺位の水中に突込んだ。全身ぬれ鼠、あとで気がついて見ると耳の中まで泥が入つていた。娘はいかにと見ると幸運にも自転車が土手の下方に引つかかつたので乘つたままでスカートの大部分をぬらしただけであつた。近所の家に導かれて裸になり豆がらの焚火で乾かして貰つた。煙で涙をだしながら、そして一人で帰りを待つて心配しているであろう長男のことを気にしながら、乾くのを待つまのつれづれに、その家の老人に実は家内が不幸があつて帰郷しているのでと話したと

ころ不心得の天罰だとさとされて全く頭が上らなかつた。幸いにしてカスリ傷も負わなかつたが一間程下流には大きな石がゴロゴロあつて、それを見たときにリツ然となつた。

以上は外道における失敗の例であるが、一生のうちには、あらゆる方面でいろいろな失敗がある。不思議に人間は楽観的で、不慮の事件に遭遇するまでは、自分だけは不幸から護られているような信念を持つている場合が多い。これが生への希望をつながせているのであろうか。不幸を経験して始めて自分だけが例外になつていないことを感ずる。それにもかかわらず今月まで生きてこられたこと、停年まで無事に勤めさせていただいたことは有難いことと幸運を喜ぶそのかたわら永い間席を汚して功なかりしことは申訳なく感ずる。当学部も年次異常な膨脹を行いつつある。これに伴い、工明会の一層の発展を祈る。（応用理学教室教授）